

# 「赤いろうそくと人魚」と「宿題ひきうけ株式会社」 における事態把握を用いた比較分析

沼本 知自

## はじめに

現代児童文学を考えるに際し、創作の観点からは佐藤さとる『だれも知らない小さな国』（1959）が象徴するように、1959年を1つの転換点とする見方ができる。また、批評の観点からは、これに前後し巻き起こった50年代の童話に対する批判意識が現代児童文学を創出させる原動力となったともいえよう（佐藤宗子『〈現代児童文学〉をふりかえる』（1997）参照）。とりわけ、この童話への批判としてたびたび取り上げられるのが古田足日による「さよなら未明」（『現代児童文学論』、くろしお出版、1959年初出、7-37）である。この古田による未明批判は、どのようにして未明らに代表される童話を乗り越え、戦後の日本児童文学がどうあるべきかについて問うた、日本児童文学史における重要な論考として位置づけられる。その後、古田は『ぬすまれた町』（1961）、『うずしお丸の少年たち』（1962）と創作活動にも精力的に取り組み、『宿題ひきうけ株式会社』（1966）において1967年第7回日本児童文学者協会賞を受賞し、児童文学作家としての地位も築いた。これらの作品は、未明のような童話と性格を異にすることは明白であり、古田も意識的に新たな児童文学の形を模索していたことを窺わせる。しかし、性格を異にすることはどういうことであろうか。この、感覚としては明白でありながら、言語化するには茫漠とした未明と古田の差異を明確に捉えなおすことが本稿の狙いである。したがって、「さよなら未明」を対称軸とした場合、未明の童話と古田の児童文学との間にどのような差異があり、それがなぜ生まれるのかを明らかにする必要がある。本稿では、「さよなら未明」にて中心的に批判がなされた未明の代表作「赤いろうそくと人魚」（『定本 小川未明童話全集1』、講談社、1976年、264-278）と、古田の代表作でもあり児童文学としても当時高く評価された「宿題ひきうけ株式会社」（『全集 古田足日子どもの本 第7巻』、童心社、1993年、11-186）を比較することで、限定的にはあるが、それぞれ克服されるべき童話の側と、創りあげようとした児童文学の側に位置づけて比較分析を行う。前述したとおり、未明と古田の両作品の違いは感覚的なものであった。このような感覚の働きと

精神の働きとを総称して認知といい、文学においてそういった認知は言語を介してはたらしかけられる。したがって比較分析の方法として、認知言語学における事態把握という概念を用いることで、どのように事態（場面）が読者に提示され捉えられうるのか——換言すれば、作品の場面における読者へのはたらしかけ——を比較することで差異を明らかにしようとするものである。

## 第1章 認知文法論における事態把握

まずは、認知文法論における事態把握という概念について説明をしなければならないであろう。そもそも、認知文法論とはロナルド・ラネカーによって提唱・整理された文法理論である。従来の文法観が、文法を規則の体系であるとしていたのに対し、認知文法では、文法を主体的に意味づけられた認知過程であると捉える点にその特徴が見いだせる。つまり、ある事態（状況、場面）を言語化（表現）する場合、感覚器官によって刺激を感知することでその存在を知覚し、その刺激源が何であり、自らにとってどのような意味を持つか認識した上でようやく言語化されるのである。このように、主体が事態をどのように捉え、言語化しているかを認知言語論では事態把握とよんでいる。次節では、本稿で用いる分析方法であり、事態把握の基本類型である、主観的把握と客観的把握について説明をおこなう。

### 第1節 主観的把握と客観的把握

池上嘉彦（2011, 49-67）において事態把握には主観的把握と客観的把握という2つの基本類型があることが示され、それぞれの規定を以下のように特徴づけている。

〈主観的把握〉：話者は問題の事態の中に自らの身を置き、その事態の当事者として体験的に事態把握をする—実際には問題の事態の中に身を置いていない場合であっても、話者は自らがその事態に臨場する当事者であるかのように体験的に事態把握をする。

〈客観的把握〉：話者は問題の事態の外にあって、傍観者ないし観察者として客観的に事態把握をする—実際には問題の事態の中に身を置いている場合であっても、話者は（自分の分身をその事態の中に残したまま）自らはその事態から抜け出し、事態の外から、傍観者ないし観察者として客観的に（自己の分身を含む）事態を把握する。（以降下線部は筆者による）（池上, 2011, 52）

池上による特徴づけが実際の文の中でどのように現れるか、次の主観的把握と客観的把握による2つの例文を用いてみたい。

- A. 気付けば誰もいない。
- B. 気付けば私以外誰もいない。

AとBとを比べてみると、前者では事態を主体の視点から把握しているのに対し、後者では主体を含めた事態把握がなされていることがわかる。今回の場合では、事態を把握する主体である「私」が言語化されているかどうか両者の違いとなっているのである。したがって、Aのように事態把握をする際、主体がその事態に臨場して事態を把握していることから主観的把握が用いられているといえよう。一方で、Bでは事態と距離をとり、観察者として事態把握をしていることからBは客観的把握であると考えられる。

さらに、これら2つの事態把握における基本類型には、言語によって好まれる言いまわしが存在することを池上（2006, 20-27）は以下のように指摘している。

話者が事態把握に際していくつかの選択肢を有しており、そのうちのどれかを主体的に採るとするのが普遍的なことであるとしても、ある特定の事態の把握に際して話者がどの選択肢を一番普通に採るかということになると、言語間で必ずしも一致するとは限らない。（中略）日本語話者好みの〈事態把握〉のスタンスとして、認知言語学でいう〈主観的把握〉(subjective construal)を想定することができるのではないかということである。（池上, 2006, 20-21）

つまり、事態を把握するにあたり主観的把握を用いるか、あるいは客観的把握を用いるかといった選択肢を有していることは、言語において普遍的である一方で、どのような事態把握を好むかといったことは言語間において異なっているということである。そのうえで、日本語話者は事態把握に際し、主観的把握を好む傾向にあることを述べている。

## 第2節 同化と自己投入

事態把握に関連して同化と自己投入という概念について触れておく。物語において一般的に、読者は語り手の視点で物語を読み進めていく。もちろん、場合によって

は読者の視点が登場人物の1人ということもある。このことを、池上（2011, 49-67）は「海は広いな、大きいな。月が昇るし、日が沈む。」（池上, 2011, 58）という例を用いて、次のように述べている。

興味深いことに、中国の日本語学習者はこの同じ表現に特に感動する様子はないとのことである。日本語話者はこの表現を〈主観的把握〉に基づく言語化としてつまり、単なる情景描写ではなく、その場にその情景を見て感動している発話者を想定して一読むのであろう。そしてすぐに自ら自身をも同じ場に置いてみて（あるいは、その発話者に自分を同化して）情景に感動しているもう1人の発話者になるのであろう。（池上, 2011, 58）

このように、日本語話者は発話者に自らの視点を重ねあわせ、同化することで事態把握を行うことが述べられている。

次に、事態把握に関連して自己投入という概念についても確認する。自己投入について簡単に説明すれば、発話者が誰かの立場を装い事態把握を行うこと、といえよう。都築雅子（2019, 3-64）は其中で自己投入というプロセス・概念を次のように述べている。

その人に仮想的になり、その人の内側に立ち入ったかたちで1人称的に捉えようとすることであり、（中略）そのようなプロセスを自己投入と考えるならば、自己投入とは、仮想的に他者になることであり、それには他者を「内」から共感的・実感的に理解しながら、1人称の観点から捉えることを伴うといえる。（都築, 2019, 11）

上記の引用に示されるように、自己投入における特徴は他者の「内」から共感的・実感的に捉えることであり、必然、自己投入する対象の身体感覚を伴った事態把握が往々にしてなされると考えられる。近藤安月子（2012, 2-6）は、文学における話し手が登場人物の視点で経験を語ることについて究極的な話し手の自己投入であると指摘している。

## 第2章 小川未明「赤いろうそくと人魚」における事態把握

本章では古田「さよなら未明」や、その後の未明批判において頻繁に取り上げられ

た小川未明による「赤いろうそくと人魚」を童話伝統側の象徴的作品と位置づけ、分析を行うことでその特徴を掴むことを狙う。なお、ここでは、『定本 小川未明童話全集1』「赤いろうそくと人魚」（講談社、1976年、264-278）（資料①とする）を底本とし用いることとする。

## 第1節 2つの北方の海についての比較

未明による「赤いろうそくと人魚」では、北方の海が物語の重要な舞台となっている。本節では、その北方の海が描かれる冒頭部分と後半部分とを対象にして、それぞれの事態把握とその効果について分析をしていく。

【引用1】北方の海の色は青うございました。あるとき、岩の上に、女の人魚があがって、あたりの景色をながめながら休んでいました。

雲間からもれた月の光がさびしく、波の上を照らしていました。どちらを見ても限りない、ものすごい波が、うねうねと動いているのであります。（資料①、264）

はじめに冒頭部分における北方の海についての【引用1】について分析していく。「北方の海の色は青うございました。あるとき、岩の上に、女の人魚があがってあたりの景色をながめながら休んでいました。」という箇所は、語り手による俯瞰的視点によって事態把握がなされていることがわかる。さらに重要な点は、女の人魚が岩の上に上った、という行為にある。つまり、今後事態を把握する視点が舞台となっている広大な海の水面よりも高い場所に移動したことを示すと考えられるからである。以下の2つの例文をみってみる。

1. 山にあかりがともる。
2. あかりが山にともる。

どちらも山の上にあかり（例えば蠟燭の灯）が点灯している状況に違いはないが、1の場合では「山」が文の中で比較的注目される要素となるのに対し、2の場合ではあかりが比較的注目される要素となる。このように、ある事態を言語化するに際して特定の対象を際立たせることを焦点化というが、本文では「岩の上」が焦点化されることで、これまで北方の海全体を俯瞰していた視点から、岩の上から見渡すという視点へと移動したといえよう。

その次の「あるとき、岩の上に、女の人魚があがって、あたりの景色をながめながら休んでいました。」について考える前に、【引用1】における下線部についてみると、語り手が女の人魚へ自己投入したことによる事態把握であることがわかる。そして、それを踏まえると、下線部以前の「あるとき、岩の上に、女の人魚があがって、あたりの景色をながめながら休んでいました。」という文は、語り手が女の人魚に自己投入する際の視点の受け渡しを円滑にする効果があると考えられる。

下線部についてさらに分析すると、「雲間からもれた月の光がさびしく、波の上を照らしていました。」における重要な要素は、「さびしい」という心情が述べられていることで、語り手への同化がより強く促される点にある。このことにより、読者は語り手の視覚の同化のみならず、「さびしい」という感情的な面でも同期させられ、よりいっそう物語の中に自身を没入させることになるのである。

また、女の人魚に同化するに際して、「どちらを見ても限らない、ものすごい波が、うねうねと動いているのであります。」という表現が自然に捉えられるのは、既に述べたように、女の人魚が水面よりも高い岩の上に位置づけられているためであろう。事態把握をする視点が、場面の大部分を占める海の水面よりも高い位置に移されていることで、ここでの波がうねうねと動いているさまを全体的に把握することが可能になっているのである。さらに、広大な海にまわりを取り囲まれている状況を俯瞰的に捉えることで、【引用1】におけるさびしさや孤独は、より深く場面全体に響き渡っているのではないだろうか。次に作品後半部分における北方の海についても同様に分析していく。

【引用2】夜になると、この海の上は、なんとなくものすごうございました。はてしもなく、どちらを見まわしても、高い波がうねうねとうねっています。そして、岩に碎けては、白いあわが立ち上がっています。月が、雲間からもれて波の面を照らしたときは、まことに気味悪うございました。(資料①, 277)

【引用2】における「夜になると、この海の上は、なんとなくものすごうございました。」という文は、語り手による主観的把握である。同時に、読者は語り手の視点に同化することで主体の眼前に広がる海がものすごい情景であると把握しているのである。

次に、「はてしもなく、どちらを見まわしても、高い波がうねうねとうねっています。」という表現についても、主体が周囲を見回すという動作をし、波が時々刻々とうねるとい過程的变化を捉えている点から事態に臨場し、没入的であるといえ、主観的把握としてよいだろう。



「そして、岩に砕けては、白いあわが立ち上がっています。」という文についても、「そして」という接続詞からも分かるように、海を見渡すという前半の文を受けて、波について主観的に描写していると考えられる。また、波が岩に当たって砕け、白い泡が立ち上がるという描写から、ここでの主体の視点が水面に極めて近い地点にあることが推測される。

最後の「月が、雲間からもれて波の面を照らしたときは、まことに気味悪うございました。」という箇所もやはり主観的把握であると考えられる。この文では、「照らしたとき」の「とき」とは、語り手が想起するある時点を指しており、それを「気味悪うございました。」と語るのである。【引用2】全体を通して語り手は事態に臨場し事態把握しているといえる。

これらの分析結果をうけてそれぞれの事態把握とその効果を比較していく。【引用1】と【引用2】の共通した特徴として、どちらの事態把握も語り手の視点を通して事態を捉え、読者は語り手の視点と同化することで、その物語の中に臨場し物語の出来事を共感的に捉えるように促されていた。つまり、読者は語り手の視点に同化することで身体的感覚を伴って物語を経験するのである。

一方で、【引用1】と【引用2】との異なる点については、【引用1】における視点が水面より高いところに設置されることで、四方を広大な海に囲まれているという状況をより鮮明に体験的に捉えられ、これにより、【引用1】での「さびしい」という形容詞はその言葉以上の豊かな響きを伴って、読者の身体に語りかける効果を生じさせている。【引用2】における視点は水面近くに設置されることにより、波がまるで生きているかのように躍動し、岩に砕け、そして白い泡となっていく様子が仔細に描写されることを自然なものにしていた。これにより、ここでも読者は主観的把握によって【引用2】での海の荒々しさや気味の悪さを、身体的に捉えることにつながっていた。つまり、【引用1】と【引用2】における相違点は視点の高さにあり、それはつまり視点と水面との距離ともいえるであろう。この視点の高さの違いにより、【引用1】ではさびしさを、【引用2】では気味の悪さを読者は自らの身体感覚を伴い経験させられることになるのである。さらに、【引用1】では語り手による事態把握を経て、女の人魚へと自己投入がなされることで事態が捉えられるのに対し、【引用2】では、終始語り手自身が主体となり、その身体感覚を伴って事態が捉えられている点も対照的である。【引用1】において読者は、語り手の自己投入する対象である女の人魚に同化するという2重の手続きを踏む必要があるのに対し、【引用2】においては語り手に直接同化するのみで事態を把握することができる。これによって、【引用2】における事態把握のほうが、より直接的に鮮烈で躍動的な身体感覚を喚起させられるのではないだろうか。

最後に、物語全体のなかでの位置づけとして、【引用1】と【引用2】をみていくと次のようなことが言える。物語冒頭における【引用1】は、高い位置からの俯瞰的視点によって海との距離が離されることで聴覚の意識は薄れ、場面は広大な海ばかりとなり、絵画のような静けさを感じさせる文章から始まる。そして、【引用1】全体の静的な描写によって、静寂さの満ちる物語の幕開けがより一層強調されるのである。他方、【引用2】は、娘が身売りされた後の悲痛で重苦しい、物語の終末に当たる。したがって、【引用2】での水面に近い視点の設置は、身体感覚を通して海の荒々しさと凄まじさを訴えかける効果をもたらしている。そしてそれは、娘を商人へ売った業と、娘の嘆きが混然一体となって破滅的結末へと一気に加速させる効果をも生じさせていると考えられる。さらにいえば、水面に近い視点を得るには海の中に身を浸している必要があり、この描写されない身体感覚をも読者は感じ取るのではないだろうか。

このように、物語全体の中でのそれぞれの効果を見てみると、同じ海についての描写でも、視点の位置ひとつで物語の展開を予感させ、読者の身体感覚を自在に操っていると考えられる。

## 第2節 事態把握と場面展開

本節では、事態把握と主体と対象との位置関係を示す動詞によってもたらされる円滑な場面展開効果について述べる。

ある夜、女の人魚は、子供を産み落とすために、冷たい、暗い波の間を泳いで、陸の方に向かって近づいてきました。(資料①, 266)

この文は女の人魚が海を陸に向かって泳いでいることを観察者である語り手が主観的に叙述している箇所である。ここで興味深いのは、観察者である語り手によって、「冷たい」という皮膚感覚、「暗い」という視覚、そして「泳ぐ」という動作が体験的に叙述されていることである。その際に「波の間」にも注目することで、自らが海を泳いでいく感覚がより強まるであろう。つまり、ここでの下線部は、観察者である語り手が女の人魚に自己投入することで、女の人魚の身体的感覚を伴った事態把握がなされているのである。

続く「陸の方に向かって近づいてきました。」において注目すべき箇所は、「(陸のほうに) きました」という表現にある。これによって、語り手の視点が町のある陸にあることが固定されるのである。以下の例が分かりやすいだろう。



1. ウサギが走って図書館へ行きました。
2. ウサギが走って図書館に来ました。

1の場合では、ウサギが観察者から離れるように捉えられるのに対し、2の場合ではウサギが観察者の方へ向かって来るように捉えられることがわかる。つまり、1における観察者は図書館の外に、2における観察者は図書館の内に位置付けられるのである。したがって、本引用でも観察者である語り手にとって人魚は向かって来るように捉えられ、そして自ずから人魚の目的地であり、事態を把握する視点は陸に設置されていることが判明する。このことによる物語的な効果についても言及すれば、それまでの舞台であった海から、これから展開される物語の舞台となる町（=陸）への場面転換をスムーズに行う効果といえるであろう。

まとめると、引用全体における事態把握は語り手によって主観的になされ、下線部では女の人魚に語り手が自己投入し、女の人魚の視点を通して海を渡る身体感覚を伴った叙述がみられる。そして、後半部分では語り手の視点が町のある陸にあることを、「来る」という主体との関係で方向を示す移動動詞によって提示することで、以後の物語展開における場面転換を自然なものとしていた。

### 第3節 想起した情景を自己投入によって描く

語り手の自己投入によって他者（娘）の想起した情景を描いた例をみていきたい。

娘は、疲れて、おりおりは、月のいい夜に、窓から頭を出して、遠い、北の青い、青い、海を恋しがって、涙ぐんでながめていることもありました。（資料①, 272）

はじめに、上記の引用は語り手が娘に自己投入することで主観的に事態把握していることが、娘の心情や動作について叙述されていることからわかる。その中でも特に、上記引用の下線部の表現についてしてみると、それがかならずしも実際の海を示しているわけではないことに気付くだろう。つまり、いくら明るい月が出ていようと、夜の海は限りなく暗く、その色は黒に近いはずである。しかし、ここでの海は青色となっているため、下線部の事態把握はまさに主体的に想起された情景であり、娘が思い浮かべる心象風景の海であることがいえるであろう。娘が実際に見ている風景ではなく心象風景であるからこそ、夜であるのに海は青く想起される。すべては心の中に想起される海だからこそ、感情は高ぶり涙ぐみ、そして「恋しい」と思われるの

である。古語における「恋し（こひし）」には見たい、聞きたい、慕わしいといった願望の意がある。現代の口語でも「おふくろの味が恋しいな」や、「郷里のあのひとが恋しい」のように用いることから、「恋し（い）」には願望が含まれていることがわかるであろう。願望の意を表す「恋し（い）」では、心の内で対象を思い描くことが要求される。当然、その対象とは身近にないもの、願望成就の容易ならぬものでなくてはならない。

これらのことを踏まえると、語り手は娘に自己投入することで娘の視点を通して、遠くの青い海を心のうちに描いた後に、それを見ることかなわない我が身を思い、心の底からどうにか見てみたいものだと思わずにはいられない娘の心境が共感的に叙述されているといえよう。

## まとめ

小川未明「赤いろうそくと人魚」において、語り手は主観的に事態を把握し、必要に応じて女の人魚や娘といった登場人物に自己投入することで事態を捉えていた。そして重要なのは、事態把握に際して多くの場合、身体感覚を強く喚起させるような叙述を伴うことで、自然と読者が物語の中に臨場し、没入することを強く促していたと考えられる。

## 第3章 古田足日「宿題ひきうけ株式会社」

本章における分析資料は、『全集 古田足日子どもの本 第7巻』「宿題ひきうけ株式会社」（童心社、1993年、11-186）（資料②）とする。この作品は1996年にアイヌ民族差別にあたる表現があるとしてかなりの範囲にわたり改作され、それに伴い古田の全集も版を改め交換するという措置が取られた。しかし、本稿ではできる限り1959年に出版された文章を分析することで、当時の童話にとってかわろうとした児童文学の姿を浮かび上がらせたいため、資料は改作以前の版を用いることを了承願いたい。

### 第1節 語り手と読者との関係

本節では、「宿題ひきうけ株式会社」における冒頭箇所であり、語り手と読者が同化されない関係から、語り手と読者が同化されてゆく変化の過程を確認する。以下の引用箇所は本文では一続きであるが、ここでは便宜的に前半部、中間部、後半部と分

けて表記している。

【前半部】 その社長のところにインタビューにいきましょう。

【中間部】 会社のある場所は、サクラが丘団地六号館の四〇八。四階までのぼっていった右がわのへやだ。だけど、宿題ひきうけ株式会社などというかんばんは出ていない。

かわりに村山正男というひょうさつが出ている。

【後半部】 「会社のかんばん出したら、お母さんにうんとしかられるからね。(中略)」と、村山社長はいった。(資料②, 13) (下線部は筆者による)

引用における前半部は、宿題ひきうけ株式会社の社長のもとへ出向く場面である。ここでの主体は次の理由から語り手であることが推測される。1つ目の理由は、「その社長」にある。吉田一彦(2012, 12-16)は指示語である「こそあ」のうち、「そ」について共同注意という概念を用いて次のようにその機能を説明している。

〈共同注意〉とは、第一に、他者が注意を向けている対象に自分自身が注意を向けることであり、第二に、自分自身が注意を向けているものに他者の注意を向けさせることである。

この概念を使うと、「そ」は、話し手が自身の領域外の事物と認識している対象への共同注意を促す機能を持つということが出来る。(吉田, 2012, 14)

したがって、上記の引用に基づくと、「その社長」と指示しているのは語り手であり、その語り手が読者へ「その社長」への共同注意を促していると解釈することができるためである。2つ目の理由として、「いって」という主体と対象との位置関係をあらわす移動動詞が根拠となる。これは、第2章第2節で説明をした「くる」の原理と同じである。つまり、語り手の視点は少なくとも「社長のところ」ではなく、そこへ向かうことのできる離れた地点にあることがわかるのである。それと同時に、語り手という主体は「行く」という動作を必要とする存在である(すくなくとも、神のように任意の場所へ突然ワープすることのできるような存在ではない)こともわかる。最後の理由は「(み)よう」と勧誘していることから、ここでの勧誘は社長の居場所を知っている語り手が勧誘する側、勧誘される側が読者であると推定できる。これらの理由により、ここでの主体は語り手であると特定でき、同時に、読者は語り手とは別個に存在していることが意識付けられる。別の言い方をすれば、読者は語り手への同化を伴わないともいえよう。

次に【中間部】について、3つの可能性が考えられる。1つ目は語り手による事態把握。2つ目は語り手に伴われて行動する読者特有の事態把握、3つ目は語り手に伴われて読者も行動しているの、両者による同一の事態把握が為されているとする見方。この問題に答えるためには【後半部】を見なければならぬだろう。

【後半部】における事態把握は、語り手による事態把握と読者による事態把握が同一であると考えられる。つまり、村山社長が「いった」という部分において、事態は主体（ここでは語り手とそれに伴われる読者）によって主観的に体験させられているのである。ここでの「いった」という体験はその場に臨場した体験であり、語り手であろうと読者であろうと同じことを体験可能なのである。しかし、物語の直接の観察者であり、言語化を担う役割が語り手である点を考慮すると、語り手による事態把握に読者は同化することで事態を捉えているとするほうが良いであろう。

それでは、前述の【中間部】における問題について検討する。すると、2つ目の可能性を選択した場合、【後半部】に登場する語り手の存在が無視され、1人で社長に会いに行くという不自然な事態把握となってしまう不適當だと考えられる。次に語り手による事態把握か、もしくは語り手と読者による事態把握かという問題であるが、ここでの焦点は読者が語り手に同化することができるか、という問いに還元できる。【前半部】は語り手が読者を勧誘する部分であり、ここでは読者は語り手に同化することはできない。なぜなら、勧誘とは他者に対して行うものであるからである。一方、【後半部】における読者は語り手と同じ体験を共有することによって、語り手の視点と読者の視点は同一であるといえる。つまり、【後半部】では読者は抵抗なく語り手の視点に同化することができると言えよう。このようにみていくと、【中間部】のどこで変化が起きた、あるいは起きなかったのかについて分析する必要があるだろう。

まず「会社のある場所は、サクラが丘団地六号館の四〇八。四階までのぼっていった右がわのへやだ。」という箇所を抜き出して、これだけを読んでもみると、読み方によっては語り手が読者に場所を伝えているように聞こえないだろうか。この原因はおそらく下線部の「た」にあると考えられる。藩鈞・小澤伊久美（2006, 44-51）は、従来の「タ」の用法とされてきた客観的時間軸に沿った過去・完了を表すという解釈に異を唱え、話者が主観的に過去の事態を想起して語りの「イマ・ココ」に持ち込むものだと述べている。これを踏まえると、下線部は語り手が既知の情報である会社の場所を想起して読者に提示していると考えることができよう。そのように考えれば、ここでの事態把握は語り手によるものであり、読者はそこに同化することができないといえる。

次に、「だけど宿題ひきうけ株式会社などというかんばんは出ていない。かわりに村山正男というひょうさつが出ている。」という箇所について考察してみる。する

と、ここでは事態把握をする主体である語り手と、それに同化しようとする読者の間を阻む表現のないことに気付く。つまり、ここでの時制は完全に統一されており、看板が出ておらず表札のみがかかっていた、という事態は語り手の視点を通して読者にも同じように捉えられるということである。

まとめると、【中間部】における「会社のある場所は、サクラが丘団地六号館の四〇八。四階までのぼっていった右がわのへやだ。」については、語り手が既知っている会社の場所を想起し、それを読者に対して提示する点で、語り手と読者の視点は同化しえない。一方で、「だけど宿題ひきうけ株式会社などというかんばんは出ていない。かわりに村山正男というひょうさつが出ている。」では、その問題となる事態が現在のこととして扱われており、語り手と読者の視点の同化は現在の事態を体験的に捉えているという認識において抵抗がなくなる。引用全体を通して興味深い点は、【前半部】では語り手と読者の同化が妨げられ、互いを他者であると認識させられた一方で、【後半部】では共通の経験が叙述されることで同化が促された。そして、【中間部】では語り手にとって既知の情報を想起し、提示したと解釈できる程度の叙述が同化の抵抗になっているだけであり、また、現在時制における事態把握のみが、読者が語り手へ同化する際の抵抗を取り除く程度の叙述であった。つまり、【前半部】、【後半部】において読者は語り手に同化できるかについて非常に明確であったが、【中間部】ではその両者の関係における規定性は弱まっているのである。これにより、読者は語り手の発信する情報の受け手という立場から、語り手と共に事態に臨場していくという過程を円滑に捉え、事態に没入する契機になっているといえよう。

## 第2節 語り手による基本的な事態把握の傾向

「宿題ひきうけ株式会社」における事態把握の特徴として、語り手による事態把握が主観的把握を中心として構成されている一方で、事態に臨場する際に伴うであろう身体感覚が希薄であり、結果としてその叙述内容は眼前で繰り広げられる事態を外部の観察者として捉える傾向にあることを確認する。

【引用①】 つぎに髪を肩までのばした、美人の女の子がにっこりしながらおじぎをした。(資料②, 13)

【引用②】 タケシがざんねんそうにいつてみせたが、じつはなくてほっとしたというような顔つきだ。(資料②, 17)

【引用③】 風はつめたいが —いい落としたが、タケシたちが宿題ひきうけ株式会社をつくったのは、冬、五年の三学期のことだった— タケシの心は軽い。自転

車は風を切って走った。(資料②, 26)

【引用④】 モリカワ君はぼかんと口をあけてサブローの顔をみつめ、つぎにはぶるぶるとふるえだした。(資料②, 30)

【引用⑤】 ヨシダ君はすまなそうに答えた。(資料②, 73)

【引用⑥】 タケシの提案にも、ヨシヒロの提案にも、みんなはさんせいした。だが、どのくらいほんとうに役だつのか、たいていの子がおどおどした目つきだった。(資料②, 140-141)

【引用⑦】 サブローが口をとがらせた。(資料②, 162)

【引用⑧】 (語り手)がおどろいてたずねると、タケシ君はむねをはっていった。(資料②, 184)

【引用①】 は非常にシンプルな、語り手による典型的な主観的把握である。これは物語の冒頭会社にてインタビューをする場面であり、ここでは語り手とそれに連れ添って行動する読者という構図がまだ色濃く残っていることがわかる。【引用②】 では「ぞんねんそう」「ほっとしたというような」という叙述から、タケシの心境を自己投入することなく、捉えていることが分かる。つまり、「ぞんねんそう」「ほっとしたというような」という表現は、語り手にとってどう見えているかを主観的に叙述しているのである。【引用③】 においても、「つめたい」という身体感覚によって語り手がタケシに自己投入しているようでもあるが、この「つめたい」という身体感覚は、その場に臨場している語り手にとっても同じであり、タケシでしか知覚し得ない感覚を共感的に捉えているわけではない点であまり自己投入的な認識を促しはしないであろう。【引用④】 においても、モリカワ君の感情は「ぼかんと口をあけて」「ぶるぶるとふるえだした」という語り手による観察によってのみ捉えられている。続く【引用⑤】 から【引用⑧】 についても、各事態の登場人物の感情は自己投入ではなく、外部の主体(語り手)によって主観的に観察されていることがわかる。

以上みてきたように、語り手はある事態に際し、主観的把握によって登場人物の心の動きを捉えている一方で、それが自己投入による身体感覚を伴わないことが確認できる。加えて、観察者である語り手自身も、眼前で繰り広げられる事態をただ観察するのみで、そこに臨場しているがゆえの語り手自身の身体感覚も同じく欠如しているようにも見受けられた。つまり、主観的把握と言いながら、その根拠の中心は主体が言語化されない点と、登場人物の心情を主観的に捉えている点のみなのである。これにより、語り手とそれに同化しようとする読者の存在は、物語の中に参与する主体というより、事態と直接的な接点を持たない観察者としての側面が強調されると考えられる。



### 第3節 例外的に自己投入する例

第2節でみたように、「宿題ひきうけ株式会社」における大部分の事態把握は、語り手による主観的把握がなされるものの、身体感覚を伴った登場人物への自己投入は目立たなく、語り手の眼前にて繰り広げられる事態を観察者として捉える傾向にあった。本節では、作中の大部分を占める前述の事態把握のあり方に対して、語り手による身体感覚を伴った登場人物への自己投入が存在していることを示す。

まずは、登場人物の1人であるコウヘイに語り手が自己投入している例を引用する。

【引用い】コウヘイの目には、以前童話で読んだ天国の門がうかんでいた。門の前で人びとはありのように行列をつくっている。門番がいて、門のなかにはいれる人と、はいれない人とをより分ける。生きているときに、よい行いをした人だけが、なかにはいれるのだ。(資料②, 156-157)

【引用い】では、語り手がコウヘイの目に天国の門が浮かんでいたことを叙述するところから始まる。当然、この天国の門はコウヘイの想像であり、語り手には観察不可能である。したがって、ここから語り手のコウヘイへの自己投入がはじまると考えられる。自己投入による具体的な事態把握は、次の文以降の情景描写で確認できる。つまり、語り手がコウヘイに自己投入することで、コウヘイの想起した天国の門の情景が、今日の前で展開されているかのように捉えられる。そしてそれは、下線部のような現在形を伴い表現されることでイマ・ココを強く意識させ、より体験的な事態把握を促すのである。その結果、【引用い】における自己投入は、ヨシダ君に自らの了見の狭さを指摘され、そのことを童話で読んだ天国の門と結び付けて体験的に捉えることで、実感を伴って理解していく過程を鮮明に描き出している。

語り手がヨシダ君に自己投入する例についてもみてみよう。

【引用ろ】ヨシダ君は頭をかいた。すぐに役にたつそろばんだけをおぼえようとしたのは、どうもまちがいらしい。だが、大学出に負けないだけの勉強をしなくてはならないと思うと、気が重い。(資料②, 175)

【引用ろ】でも、1文目の語り手による自己投入の対象の叙述から始まる。そして、主体がヨシダ君に切り替わり、主観的把握がなされているように続く。しかし、「一貯金ならやめよう。お金はいま使ってもいいはずのものだ。」(資料②, 113) や、「へんだなあ。」(資料②, 173) のように、本作品において登場人物の内言はダッシュ

記号で表現されているため、2文目以降の叙述はヨシダ君による内言でないことがわかる。したがって、2文目以降は、語り手がヨシダ君に自己投入することで成立している事態把握であると考えるのが自然ではなかろうか。まとめると、【引用】は、語り手の視点でヨシダ君が頭をかく動作を捉えるところから始まり、語り手はヨシダ君に自己投入することで、すぐに役に立つ技術としてそろばんを習得しようとしていたことの誤りに気付き、大学卒業者に劣らない漠然とした、しかし大変であろう勉強を思い、気が重いと感じている様子を語り手を通じ共感的に経験させる効果を生んでいるであろう。

## まとめ

「宿題ひきうけ株式会社」では、語り手による主観的把握を中心としつつ、特定の登場人物に自己投入をしないまま、事態を外部から観察しようとする特徴を備えていた。これによって、各登場人物の心の動きは外部から捉えられると同時に、どの人物に対しても第三者としての冷静な観察を可能としていたといえる。例えば、「宿題ひきうけ株式会社」「第3章20 ポスを追放しろ / 21 優等生にもあやまらせろ / 22天国の門前で」(資料②, 141-160)では、いじめられた側の人物だけに自己投入することでボスの悪い面のみを描く一面的な見方に陥ることなく、外部の観察者としてボスという人物を描くことで、ボスの苦悩などのいじめられた側には決して捉えることのできない側面にも光を当て、物語を奥深いものになっている。一方、物語のいくつかの箇所、語り手の登場人物に密着した自己投入が認められた。それは例えば、コウヘイが自らの了見の狭さを実感的に理解していく過程であり、ヨシダ君がこれまでの認識を改めさせられ、これからの人生に立ち向かおうとする場面であった。「宿題ひきうけ株式会社」において挿入される語り手の登場人物に対する身体感覚を伴った自己投入は、いずれの場合にも今まで気付くことのなかったことに気付き、登場人物の人間の成長に関わる重要な場面であったことから、作者が読者に自らのこととして考えてほしい箇所であったと考えられよう。繰り返しになるが、読者は語り手の視点に同化することで物語における場面を捉える。そして語り手が登場人物に自己投入するとき、読者もまた登場人物と自らとを同化させるのである。これにより、作者が読者に立ち止まり、考えてほしい事柄について、登場人物を通して読者は考えることが促されるのではないだろうか。

## 結論

本論文は古田足日「さよなら未明」を対称軸として、批判の対象となった童話の代表として小川未明「赤いろうそくと人魚」を、新たな児童文学を創出しようとした側として古田足日「宿題ひきうけ株式会社」を位置づけ、事態把握という概念を用いて分析することで両者の差異を明らかにすることを目的とした。これにより、「赤いろうそくと人魚」における事態把握では、語り手は自らを主体として、あるいは登場人物に自己投入することで身体感覚をともなった事態把握が多用されていることが確認できた。さらに、語り手がこのような身体感覚を伴った事態把握を行うことにより、それに同化しようとする読者を物語のなかに深く没入させる効果を生じさせていた。

一方、「宿題ひきうけ株式会社」では、多くの場合において身体感覚を伴った登場人物への自己投入は見られず、あくまで事態把握の主軸は語り手によるものであった。さらに、通常の主観的把握であれば問題となる事態に参加する際、そこでの身体感覚を伴って叙述がなされるが、「宿題ひきうけ株式会社」においては事態把握の主体である語り手の身体感覚は最小限にとどめられていたことも特徴といえる。このことによって、登場人物の人物像がある特定の見方に縛られることなく、奥行を伴った姿として描かれることを可能としていた。しかし、そのような事態把握が多用される中、語り手が登場人物に自己投入を行っていた箇所も確認できた。そして、それらの箇所は物語における重要な箇所であると同時に、作者の読者への問題提起であったように考えられた。つまり、語り手が重大な問題に直面した登場人物に自己投入することで、語り手に同化しようとする読者が自らのこととして、その問題に取り組むことを作者は意図したのではないだろうか。

以上より、事態把握の観点から「赤いろうそくと人魚」と「宿題ひきうけ株式会社」について分析すると、前者では身体感覚を伴った事態把握によって読者が物語に対して没入することを促し、後者では語り手の身体感覚や自己投入が抑えられることで、読者は事態に深く参与しないことによる広角な捉え方が促されたといえる。この事態把握の差異が、本稿冒頭で述べた両作品の感覚的差異の原因の1つであろうと推察される。

また、本研究を通して次の2つの点において今後の研究課題が見つけられた。1つは、古田「さよなら未明」において用いられた散文性といった用語や言葉に関する問題意識との関連である。つまり、それらの用語や問題意識が実際の現代児童文学作品においてどのように昇華されたかについて、作品分析と「さよなら未明」との影響関係を解明していくという課題である。もう1つは、「さよなら未明」において比較的

肯定的に評価された千葉県三や、未明と同じく否定的に評価された立原えりからの分析にはじまり、古田が賛辞を送った後藤竜二『大地は天使でいっぱいだ』、あるいは民話を下敷きにしている点で童話的要素を持っていると考えられる松谷みよ子『龍の子太郎』といった作品群を対象に分析を行うことで、事態把握という概念を用いた童話から現代児童文学にいたる過渡期の見取り図を描くことが可能であるか検討することである。

## 【引用・参考文献一覧】

- 池上嘉彦. 「〈主観的把握〉とは何か——日本語話者における〈好まれる言い回し〉」『言語』. 5月号. 20-27. 大修館書店. 2006年
- 池上嘉彦. 「日本語と主観性・主体性」『ひつじ意味論講座 第5巻 主観性と主体性』. 49-67. 澤田治美 編. ひつじ書房. 2011年
- 小川未明. 「赤いろそくと人魚」『定本 小川未明童話全集1』. 264-278. 講談社. 1976年
- 近藤安月子. 「第1課 私（原点）」『日本語文法の論点43』. 2-6. 近藤安月子、姫野伴子 編. 研究社. 2012年
- 佐藤宗子. 『〈現代児童文学〉をふりかえる』. 久山社. 1997年
- 都築雅子. 「第1章 事態把握の主観性と言語表現 認知言語学の知見より」『語りの言語学的 / 文学的分析』. 3-64. 郡伸哉、都築雅子 編. ひつじ書房. 2019年
- 中村三春. 「未明童話の様式論 —『赤い蠟燭と人魚』を読み直す」『研究 = 日本の児童文学3 日本児童文学史を問い直す——表現史の視点から』. 55-81. 日本児童文学学会 編. 東京書籍. 1995年
- 野上暁. 『日本児童文学の現代へ』. パロル舎. 1998年
- 藩鈞、小澤伊久美. 「時間認識は言葉にどう表れるか」. 『言語』. 5月号44-51. 大修館書店. 2006年
- 古田足日. 「さよなら未明——日本近代童話の本質——」『現代児童文学論』. 7-37. くろしお出版. 1959年
- 古田足日. 「宿題ひきうけ株式会社」『全集 古田足日 子どもの本 第7巻』. 11-186. 童心社. 1993年
- 宮川健郎. 「2 〈子ども〉の再発見」『講座昭和文学史 第3巻 抑圧と開放 〈戦中から戦後へ〉』. 260-269. 有精堂出版. 1988年
- 吉田一彦. 「第3課「そ」」『日本語文法の論点43』. 12-16. 近藤安月子、姫野伴子

編. 研究社. 2012年